

小樽色内
いらっしやいませ

(上)

羽村びおら

●第一章1

港町の、レンガにツタのからまるカフェで、

私たち3人はよく、おしゃべりを楽しんだ。

とはいっても、ここは横浜でも、神戸でもなく、北海道の小樽。

知っている人がまだあまりいないのをいいことに・・・

という感じはあった。

忙しい男2人も、

どうしてかそんな時間を作っていた。

今の地元の東京を離れて、なので、いい息抜きになっているようだった。

私も、いろいろ思うところはあるけれど、2人といるのがとても楽しかった。

みんなももともとは北海道の生まれで、高校は札幌で、同窓。

お兄さまたちは同級生で、私は5年下だ。

それが、様々な事情で、ここにいる。

彼らはまだ東京に暮らしもし、仕事もしている。

私は一度、東京に出たものの、夫のリストラで、結局私の親戚筋をたよって、この小樽に移り住んだのだった。

2人と出会った頃の私は、かなりうつうつとしていた。

奥さんと離れて息抜き...の隆之お兄さまや、

もう40だというのに、まだ再婚しようとはせず、独身貴族を楽しむ充お兄さま・・・には、本当は、その時のわたしの姿はどう見えていたのだろうか。

わたしのゆううつは、東京から北海道に戻ってきたものの、故郷の札幌には住めず、出かけることもできなかったからだった。

●第一章2

札幌は、県庁所在地みたいな街なので、とても便利だった。

この前まで住んでいた東京のはずれの街よりも便利な気がしていたくらいだ。

それが、その札幌には住めず、隣の小さな街・小樽にいる。

小樽は、観光スポットは大正浪漫風で素敵だが、それ以外は、やはり、地方の小さな街ということで、私にはやや物足りなく思えた。

私が大好きだった古い、少しさびれたような風情も、今は本当に寂しく思わせられるだけだった。

なぜ、ここに夫と私が移り住んできたかというと...

小樽に移り住んだ理由は、

「私の親戚の好意で家賃が1万円だったから」と、

「夫の再就職先が札幌にしか見つからなかったから」

ということだった。

もともと夫は東京のいわゆるIT系の会社にいたのだが、会社が倒産直前で、リストラされてしまった。

それまでもお給料はどんどん厳しくなっていたので、ぜいたくはしていなかったが、貯金もそうあるわけではなかった。

三十過ぎてからの結婚だったこともあって、子供を望む夫が、あまり長時間のパートも許してはくれなかったこともあり。

とはいっても、知り合いもない東京で、特技もない私には、さしたる仕事も見つからなかったけれど。

夫もリストラの時は36才で次の仕事はなかなか見つからない。

そのときに、夫の古くからのネット仲間が「札幌でなら仕事を世話できる」とメールをくれたのだった...

夫の新しい仕事というのは、パソコン修理とかサポートとかいう仕事だった。

地元の電気屋さんが展開するチェーン店のひとつに勤務するということだった。

札幌の中でも小樽寄りの住宅地の駅前での仕事だった。

得意のパソコンが活かせるということで、夫は乗り気になった。

さらに、私の遠い親戚が、家賃1万円で一戸建てが貸せる、ということをして、私の父に言ってきた。

それで、どうにか引っ越し費用を工面してこの小樽にやってきたのだった。

もともと東京生まれの夫も、つらかった最後の数年間で東京暮らしに嫌気がさして、都落ちを決意したのだった。

もう4月も半ばだというのに、北海道は夫の想像以上に、そして私の記憶以上に寒い。

慣れない仕事に向かう夫の背中が、気の毒に見えて仕方がない。

築5年という今度の家も、実はちょっと使い勝手が悪い感じだ。

でも、父の従兄の息子である和彦さんに安く住まわせてもらっているので文句をいう気にはなれない...

「人が住んでないと、家は傷むからね。」

●第一章3

人が住んでいないと家が傷むから、住んでもらえるだけでありがたい、そう和彦さんは最初から言ってくれていた。

「北海道は雪が、ね。まあ、本州は梅雨もあるし、湿度もあるから、トータルすると同じかもね。」

いくら地方の街で、思うような借り手が見つからないとはいえ、申し訳ないので、早くきちんとした家賃を払いたいと夫と二人、思っただけだけれど。

でも、後から充さんに、

「あの家に、和彦さんとお母さんは妹夫婦を戻したらしいから。」

と言われて、少しは安心したのだけれど。私たちはあくまで「つなぎ」なのだ、きっと。

和彦さんは、お父さんが医者で資産家。

本人は接骨院をやっていて、今は福祉関係のサービスにも手を広げていて羽振りがいい。

私がそういう家と親戚なもの、

はるか昔に、和彦さんのお祖父さまと私の祖父が兄弟で、それぞれが思いを抱いて、学問をして立身出世をするために、親戚筋に養子に出たからなのだった...

で、小樽の「豪商」といわれる大金持ちの家と縁組して、それが充さんの実家にあたるのだけれど。

意外と、北海道とか、いわゆる「新天地でがんばる」人は、

昔の日本人でも、

「風と共に去りぬ」のヒロイン・スカーレットの家系のように浮き沈みを見ていたりするもののように、

私のまわりでは聞いている。

あまり裕福ではない公務員の家生まれた祖父と和彦さんのお祖父さん、

そしてその兄弟たちは、跡取りの長男以外、みな子供のいない親戚・知人の家に養子に入った。

学問をして、出世するために。

兄弟同士で、出世度を競い合ってもいたらしい。

祖父は公務員の家に入り、文系の大学教授になった。

和彦さんのお祖父さん...大伯父さんは小樽の医者の家に入り、医者になった。

その大伯父さんは祖父によく似ていたので、祖父のお葬式の時、

中三だった私には、

祖父が生き返ったかのように思えて仕方がなかったものだ。

そしてその次の年の夏、その大伯父さんが亡くなり...

小樽でのお葬式の際に、充さんと出会ったのだった。

私の父は、私を親戚にできるだけ引き合わせておきたかったらしい。

私は妹と二人姉妹だったので、将来、何かの時に動くのは姉の私の方とっていたようなのだ。

私はそのころ、札幌の進学校と言われる高校に通っていて、それが父の自慢でもあったのだが...

その姿に目を留めて、話しかけてきたのが、東京の大学に入っていた充さんだった。

自分の出身校の制服が懐かしかったらしい。

充さんは和彦さんからみて母方の従弟なのだ。

というわけで、私と血のつながりはない。

●第一章4

古いお寺のりっぱなお葬式で、大人たちはまた久しぶりに親戚に会えるのが実は楽しいようだった。

「充ちゃん、うちの娘に、あんまり東京の話はしないで」

お通夜で、ビール片手の父は、充さんにそれとなく釘をさした。

その頃の私は、本当に東京への進学に憧れていた。

東京への進学は、当時の地方の子にとってステータスでもあった。

でも、数学の成績が悪い私は私立の文系ということになり、家の経済状態から反対をされていた。

その点、東京の有名な私立の理系に学んでいた充さんは、見るからにお金持ちのプリンスで...

大人の基準で言えば、同じ北海道でも、住む世界が違うというところだった。

でも、充さんはそんなことは思いもしないという風に、私に優しく接してくれた...

でも、不思議なことに、その当時はそれだけで終わってしまったのだ。

メールもまだない時代、住所を教えあうのも何だか重いことだったし...

私の中でさえ、いまいち、恋愛感情には発展せずに、なまなましさとは無縁な、憧れだけで終わってしまったのだ。

あれから20年。

充さんは、あの頃より素敵な大人の男性として、私の前に現れたのだ...

...和彦さんの家で、充さんと私は再会したのだけど、

その時一緒だった、一見、冷たい感じの男性が隆之さんだった。

とりあえず、家の中が落ち着いた頃、夫と私は和彦さんの家まで、挨拶と、ご近所付き合いな

んかの相談に出かけた。

敷地が広くて、そう古くはないけれど、このあたりでも珍しい、いかにも本家らしい和風の家だ。

曇りガラスの引き戸の玄関の前で、チャイムを押そうと思ったのだけれど、広そうな玄関の中はお客様らしい。

どうしようかためらっていると、

それではどうも、と言いながら、スーツ姿の背の高い男性二人がカラカラと戸を開けて出てきて…

一目でわかったのだ。

その人が充さんだということは。

充さんも驚いたように私を見つめ、

「奈緒子ちゃん？」

「充さん？」

「えっ、さっき和彦さんに聞いたけど、えー、本当に？ いやあ、参ったなあ。」

充さんは本当に素敵な大人になっていた。

上品さ、優雅さはさらに増し、いい年齢の重ね方をしているといった感じだった…

それに比べて私の方は…

そんなこともとっさに思い、充さんのことは何も聞いていなかったもので慌て、驚き、夫を紹介するのも忘れてしまったくらいだった。

「ミツル君、もう、おいとましないと。」

連れの男性に促されなかったら、私たちはそのまま、ずっともじもじしていたと思う。

「名刺、渡しておきますね。」

充さんは私の手に名刺を一枚くれた。肩書きは社長になっていた。

「良かったらメールでも下さい。それじゃあ...」

夫にもあいまいに会釈をし、和彦さんにも別れを告げつつ、充さんは連れと一緒に大きい通りの方へと向かって歩いていった。

「...あれだもの。相変わらずのプレイボーイだ。」

和彦さんが苦笑すると、夫は笑い、

「プレイボーイ、ですか。」

「見りゃわかるっしょ。おまけにダンナのいる前で名刺なんか渡してくるんだから...」

身内の不出来を恥ずかしがるように、和彦さんは頭をかくと、

「いやあ、雅巳君も奈緒子ちゃんも、とうとう来てくれたね...」

充さんより二つくらいしか上ではないのに、地元の世話役らしいおおらかな口調で、和彦さんは私たちを家の中へと招いてくれた。

...その翌日に、私は充さんにメールを送っていた。

●第一章5

和彦さんもあれ以上充さんのことに触れてはくれなかったもので、このまま疎遠になってしまいそうで、それは失礼なことのような気がしたからだった。

それに、名刺の会社の住所は東京だったから、返事ももらえず、でも私の方は義理は果たせるだろうなんて考えていた...

のに、すぐにお返事は来たのだった・・・

充さんは、まだ東京には戻らず、小樽の近くに滞在しているとのことだった。

懐かしいし、さらには仕事関係で頼みたいことがあるので、近々会いたいというのだ。

仕事関係、ということに私は安心して、充さんに会うつもりになった。

でも、普通の主婦の私に仕事って？

夜、夫が帰ってきたりして、ちょっと落ち着いて考えると、

充さんに会うことには気がひけてきた。

高校生の頃の私は、無謀だったかもしれないけれど、輝きみたいなものがあったと思う。

というか、元気があった。

まだ子供だったからお金がないことも気にならなかった。

でも、今、こんな苦しい状況で...

少しばかりおしゃれなんかしても、充さんにはわかってしまうだろう。

いや、和彦さんに聞いていて、本当はわかっているのかもしれないのだけど。

メールの返事はなかなか書けなかった。

携帯の番号は書いてはあったけれど、電話なんかとんでもないし...

次の日の昼間も、そんなことを考えながら、

駅近くの銀行に向かって歩いていると...

ふと、私は呼び止められた。

「な—おこちゃん。」

充さんだった。

充さんも少しどぎまぎしたように笑みを浮かべ、

「今、時間はありますか？ 良かったらお茶でもどうですか？」

私は嬉しくて、うなずいていた...

充さんに導かれるまま、私はレトロなレンガ造りの倉庫の路地に入っていった。

そして、その中の一軒、倉庫を改造したという喫茶店に案内された。

ジャズがゆっくりと流れる一階の奥、アンティークなソファ風の椅子が置かれたスペースは、「予約席」とテーブルに置かれていたのだけれど、

充さんはマスターと知り合いらしく、その席に座らせてもらうことができた。

最初は、ちょっと二人で顔を見合わせて、お互いに照れて笑って。

でも、リードしてくれるのはやっぱり充さんの方だった。

「このお店、いいでしょう？ さっきのマスターは僕と同じ年なんだけど、ずっとこういうお店に憧れてて、去年ようやくオープンしたんですよ。」

確かに、こういうお店の老舗といわれるところに似ている。

私も高校生の頃から、こういうお店は好きだったけれど。

もう私と同じ年代の人が、お店の経営はもちろん、地域の雰囲気づくりにひと役かっているの

だなあとつくづく感じ、

自分は何か取り残されていくような寂しさも覚える。

でも、もちろん、そんなことは言えない。

それが伝わったのか、充さんは優しい笑みを浮かべて、

「小樽の暮らしはとうですか？」

私は仕方なく、

「まあまあ、といったところでしょうか。」

「仕事も忙しくて？」

私はちょっとわからなくて、充さんを見つめるばかりだった

「あれ？ 和彦さんからまだ話がいてない？」

「ええ。」

「えーっ、それじゃあ僕が話しちゃマズいのかな。」

私は困るばかりで、充さんも黙ってしまった。

●第一章6

「じゃあ、それはまた今度ということで。」

私の方も、あたりさわりのなさそうな話題を探し、

「充さんのお仕事、こちらの出張が多いんですか？」

「...ってこともなくて。僕のようなね、能天気なヤツにもいろいろあるんですよ。」

充さんは照れ笑いのようだったので、私は安心して、

「いいんですか？ 奥さんも...」

その言葉をさえぎるように、充さんはいきなりタバコを取り出して火をつけると、

「いや、いませんから。今、僕はバツイチ、独身。」

何と言っていいのか、私はすごく困った。

私は本当にあわててしまい、また余計なことを言ってしまった。

「子供さんとか...」

「向こうが連れて行きましたから...もう5年になるかな。本当に今は気楽なもんですよ。」

「ごめんなさい。変なこときいて...」

「いいえ...久しぶりで会えたんだから、いろいろありますよね。でも、奈緒子ちゃんは、いい意味で変わってないですね。」

「いいえ。充さんの方こそ...」

ここはコーヒーの専門店なのに、と笑いながら、充さんは私と同じ紅茶を一口飲んだ。

それから充さんは、自分の仕事について話してくれた。

大学を出た後、一度は大手のソフトウェア会社に就職したものの、母方の東京の伯父さんに頼

まれ、伯父さんの会社に入ったこと。

その会社がグループ化する時に、ソフトウェア部門の子会社の社長を任せられ、現在に至る、と。

「…でも実際は、この前一緒にいた人が親会社の社長なんですけど、あの人の目付け役なんですけどね。」

充さんは困ったように笑う。その時、充さんの携帯が鳴った。

「ウワサをすれば彼だ。ちょっとすみませんね。」

と、充さんはその場で電話に出た。

らしくないな、という気もしたけれど、余裕の裏側で、本当は重要な用事を二人で抱えていたのだろう。

でも、私の方には苦笑いしながら、でも不思議なことに、ちょっと甘えたような口調で、充さんは受け答えをしていた。

「ダメ。今、重要な打ち合わせだから…仕事だってば。じゃあ、終わったらこちらから連絡しますから。」

そんな充さんの様子から、いろいろ肩書き上であっても、友達のように仲がいい二人なのだろうと思ったら。

…その電話の相手、充さんの連れのオジサンがやってきたのだ。

店のドアを開けて。ドアのカウベルが鳴り止まないうちに、つかつかと充さんに歩み寄ってくる。

「…こんなことだろうと思ったよ。何やってんの。」

「...だからこの地域の仕事。打ち合わせ。」

「打ち合わせ？」

メガネの奥から、私にも冷たい視線を彼が投げかけてくるので、私は気まずい雰囲気はどうにかしようと、笑顔を作って彼の方を見た。

が、マホガニー風のテーブルの上には、私の可愛いスケジュール帳さえ出ていないわけで。

「へえ、仕事ねえ...」

思いっきり嫌味っぽく、充さんくらいいいスーツに、冷たいエリートっぽい風貌のオジサンは切り返してきた...

...私が言葉を失っていると、もうオジサンは私にはかまわず、充さんに仕事の話始めていた。

すると、今度は私の携帯の、メールの着信音が鳴る。

こんな時に...と思いながらも、あわててボタンを押してしまい、誰からのメールか見えてしまった。

「いろない接骨院・古川和彦」

「自宅でもできるお仕事をお願い」は件名。

—この前はどうも。ダンナさんがいたので切り出せなかったのですが、いい仕事があります...

「ごめんね、奈緒子ちゃん、またメールします。」

こう言われてまたあわてて目を上げると、充さんはオジサンに首根っこを掴まれ、引きずり出されていくといったところだった...

それはなぜか、なんとなくほほえましくも見えたのだけれど。

—...時間がある時に、院の方に来てもらえますか...

と、メールにはあったので、充さんと急に別れ、気が抜けてしまった私は、和彦さんを仕事場に訪ねた。

真新しく、すっきりとした接骨院の奥の院長室に私は案内され、立派なソファにかしこまって座っていると、

「ごめんね。怪しい件名だったっしょ？」

と笑いながら、仕事用の白衣の和彦さんがやってきた。

「...本当は、前から話はあったんだけど、雅巳くんが、ねえ、奈緒子ちゃんがパートに出るのも嫌だっていうから、

この前は切り出せなかったんだけど・・・」